

平成25年12月30日

佐賀新聞掲載～ひびの子育て～

園長子育てコラムVol. 17 「親の習慣が『子どもの道徳心』」

ひびの子育て

親の習慣が「子どもの道徳心」に

生物学者の井口潔先生によると、幼児期は「物事を感性で捉える」時期です。例えば「人をたたいちゃいけないよ！」と伝えると、頭で理解しなくとも「たたいちゃいけないんだ」と五感で感覚的に捉えていきます。幼児は天才的に人の行いをまねする力を持っているので、この時期に、大人が行う「挨拶（あいさつ）」や「言葉遣い」、「思いやりを持った行動」などの道徳を、しっかりと模倣できる環境を与えてあげることがとても大切です。

10歳を超えると人間の脳は、幼児期特有だった「物事を感性で捉える」ということが難しくなり、知性で理論的に物事を考えようとしていきます。例えば、幼児期に「挨拶」を習慣にしていれば、その後は、自然と「挨拶」を行うことができる人になります。一方、10歳を超えて「挨拶」の必要性を感性で捉えていない人に「挨拶」

を身につけさせようとするならば、「なぜ挨拶が必要なのか」から伝えていかなければなりません。幼児期に身につける「道徳心」が子どもたちにとっていかに大切かが分かります。

幼児期は「しなければならぬ理由」、「してはいけない理由」を事細かに説明するよりも、親自身が「善悪の基準」を持ち、見本となる行動の習慣がとても大切なようです。幼児期までに人としての基盤となる道徳心を身につけた子どもは、世の中の善悪を適切に判断し「善」を選び取る自信を身につけています。

その自信を手に入れることができれば、自ら考え、自ら行動する自主性がどんどん向上していき「生きる力」を自ら培っていくようになると思います。

（パパ記者・吉村直記＝おへそ保育園園長）

※過去記事は佐賀のブログハブサイト「saganPOST（サガンポスト、URL post.saga-s.co.jp）」に掲載。